

いちごの需給動向

調査情報部



とちおとめ (栃木県産)



きらび香 (静岡県産)

主要産地



資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（平成29年産）」

注：図中の番号は収穫量の多い順番、期間は主な出荷期間を表している。

いちごはバラ科オランダイチゴ属の多年草であることから一般的に果樹に含めることが多く、日本のように野菜として扱う国は珍しい。わが国へは江戸後期（18世紀）にオランダ人によって長崎に伝えられたことからオランダイチゴと呼ばれたが、野生のいちごに親しんでいた当時の日本人には受け入れられなかった。

日本での栽培は明治以降で、品種は福羽が中心だったが、第二次大戦後、高度経済成長

に伴い電照技術も発達し昭和40年代以降は幅広い産地と作型に対応できる品種に移り変わっていった。いちごは一定の寒さにあうと花芽をつけるという性質があり、これを利用して夏場に苗を冷蔵するなどの方法で生育をコントロールし、現在では、ほぼ周年で栽培・出荷が可能となっている。ちなみに、いちごの赤い実は果実ではなく、種子のベッドの役割をしている花托（かたく）の部分である。

作付面積・出荷量・単収の推移

平成29年の作付面積は、5,280ヘクタール（28年比98.3%）と、28年に比べてやや減少した。

上位5県では、

- 栃木県 554ヘクタール（同 94.5%）
- 福岡県 455ヘクタール（同 98.3%）
- 熊本県 316ヘクタール（同 98.4%）
- 静岡県 303ヘクタール（同 98.4%）
- 長崎県 268ヘクタール（同 96.8%）

となっている。

29年の出荷量は、150,200トン（28年比103.6%）と、28年に比べてやや増加した。

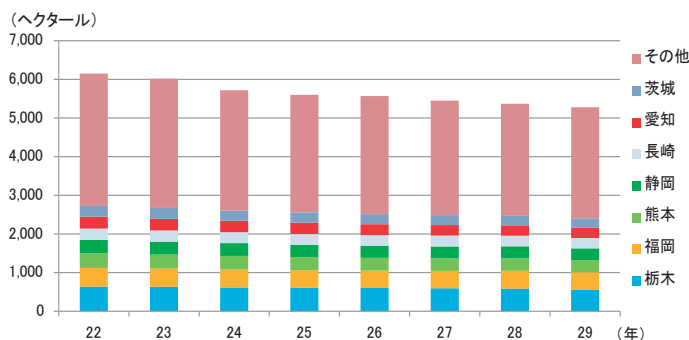
上位5県では、

- 栃木県 23,600トン（同 100.9%）
- 福岡県 16,900トン（同 114.2%）
- 熊本県 10,300トン（同 106.0%）
- 静岡県 9,950トン（同 105.3%）
- 愛知県 9,410トン（同 105.5%）

となっている。

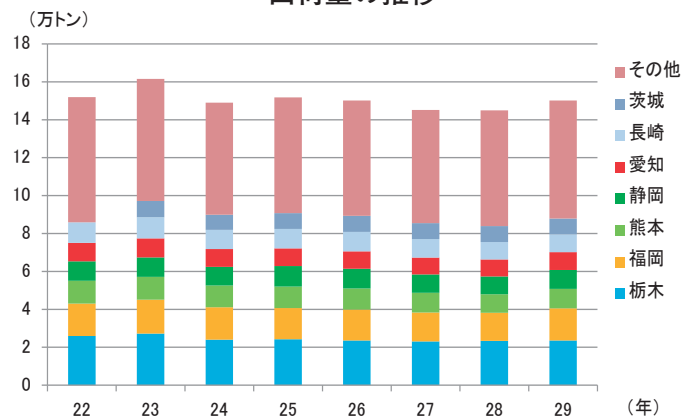
出荷量上位5県について、10アール当たりの収量を見ると、栃木県の4.53トンが最も多く、次いで福岡県の3.90トン、愛知県3.79トンと続いている。その他の県で多いのは、佐賀県の4.32トン、茨城県の3.70トンであり、全国平均は3.10トンとなっている。

作付面積の推移



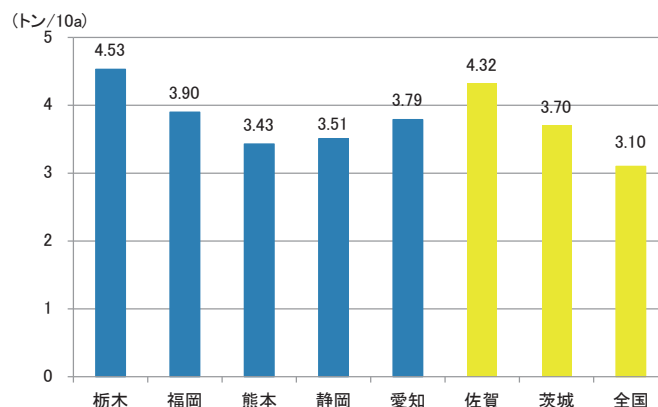
資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（平成29年産）」

出荷量の推移



資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（平成29年産）」

平成29年の主産地の単収



資料：農林水産省「野菜生産出荷統計（平成29年産）」

注：黄色は、出荷量上位5県以外で単収が多い2県および全国平均。

作付けされている主な品種等

明治初期に米国より栽培用品種の導入が試みられたが定着せず、その後、明治32年に福羽逸人がフランスの品種から育成した「福羽」の成功により本格的に商業的栽培が始まった。「福羽」はさまざまな品種の親となり、その後、昭和40年代に至るまで70年間ほど

営利栽培された。戦後、ハウス栽培も普及し冬場でも栽培できる作型も広まったことから、現在では、北海道から九州まで栽培されており、栽培地域や作型に加え、果色やサイズにより差別化した品種など多様化が進んでいる。

都道府県名

主な品種

栃木県 とちおとめ、スカイベリー

福岡県 あまおう

熊本県 ゆうべに、さがほのか、恋みのり、ひのしずく

静岡県 紅ほっぺ、きらび香

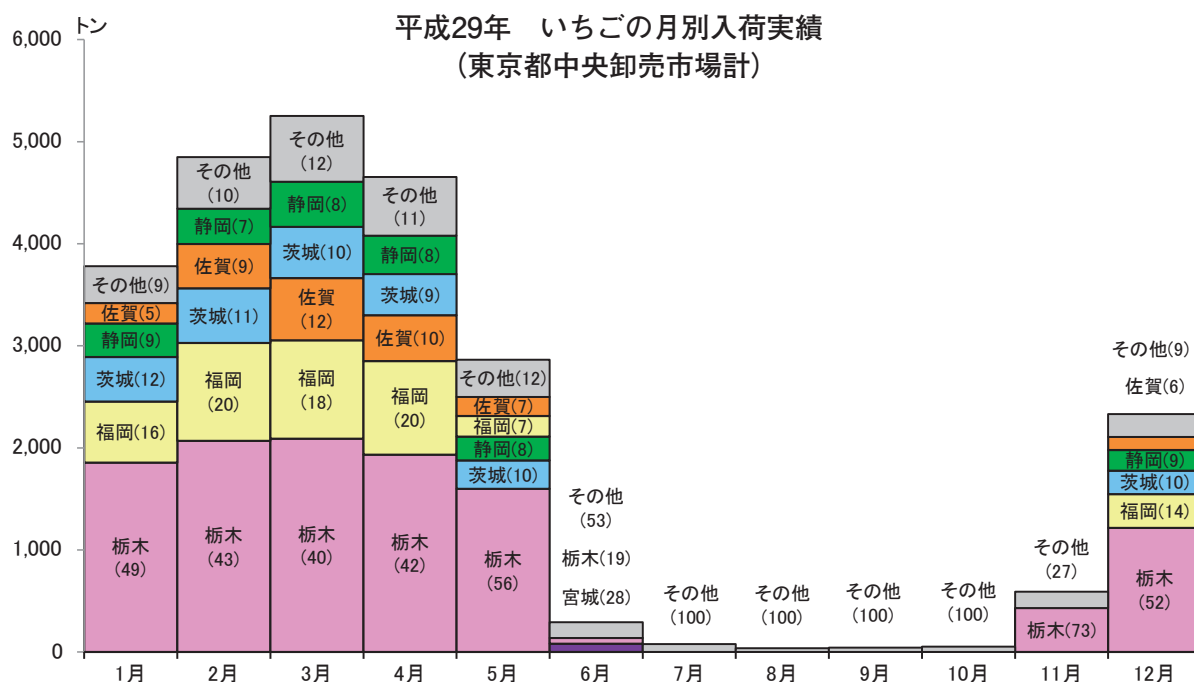
長崎県 ゆめのか、さちのか

資料：農畜産業振興機構の関係者聞き取り。

東京都・大阪中央卸売市場における月別県別入荷実績

東京都中央卸売市場の月別入荷実績（平成29年）を見ると、11月から栃木県の入荷が増え始め、12月からは福岡県、茨城県、静岡県、佐賀県も加わり急増する。ピークは3

月で5月まで入荷が続く。6月以降は宮城県から入荷するものの量は少なく、10月までは入荷が非常に少ない時期が続く。

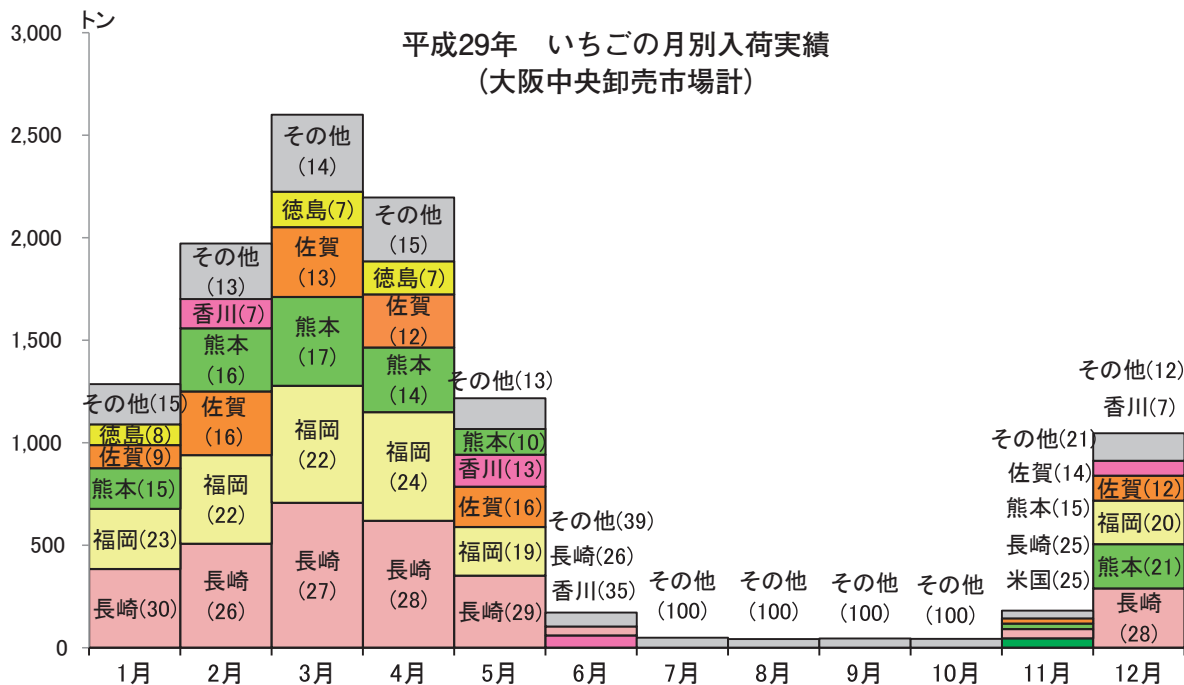


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：平成29年東京都中央卸売市場年報）

注1：（）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（％）である。

大阪中央卸売市場の月別入荷実績（平成29年）を見ると、11月から入荷が始まる長崎県、熊本県、福岡県、佐賀県は春に向けて数量を増やしていく。1月以降は徳島県、香

川県も入荷し3月のピークに向けて数量を増やし、5月まで出荷が続く。6月は長崎県、香川県から出荷がみられるが7月から10月までは非常に入荷が少ない時期が続く。



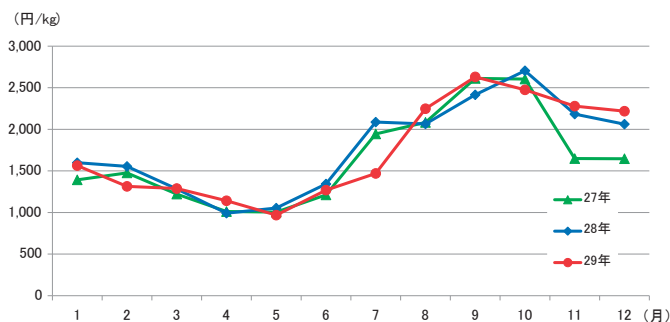
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：平成29年大阪市・大阪府中央卸売市場年報）
注1：（）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

東京都中央卸売市場における価格の推移

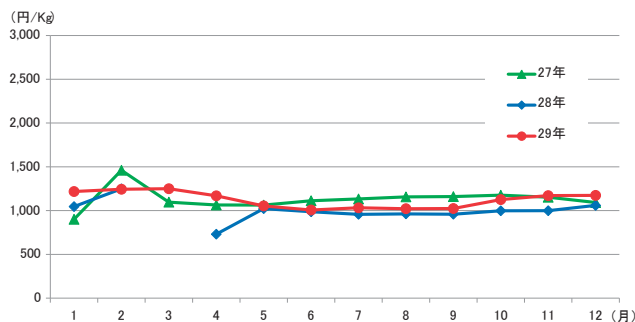
東京都中央卸売市場における国内産の生鮮いちごの卸売価格（平成29年）は、1キログラム当たり968～2630円（年平均1738円）の幅で推移している。出荷の増える1月からは下落し、4～5月に底となり、7

～10月にかけて上昇する傾向がみられる。一方、外国産の生鮮いちごの卸売価格は1000円～1500円の幅で推移し、国産に比べて変動が少ない。

卸売価格の月別推移（国内産）



卸売価格の月別推移（外国産）

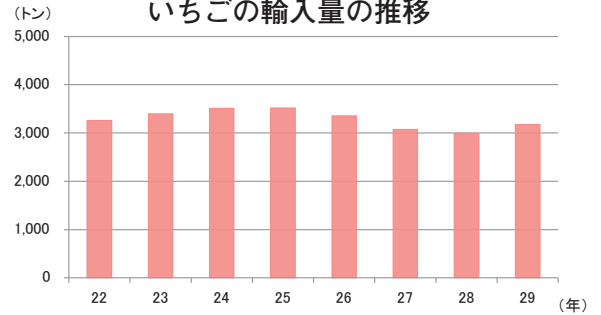


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」）

輸入量の動向

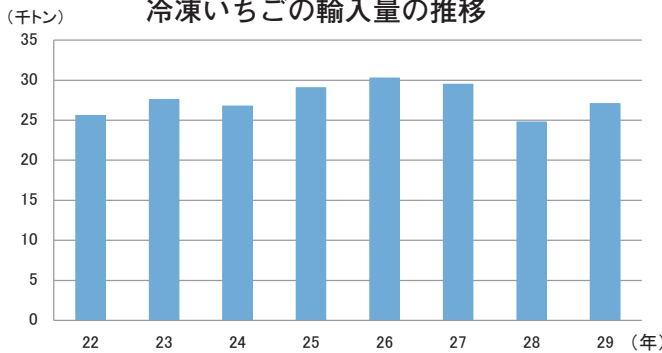
生鮮いちごの輸入量は3000トン前後で推移しており、国産の出荷量が極端に少なくなる夏場に業務用として輸入される米国産が中心である。冷凍いちごは2万5000トンから3万トンの中で推移しており、中国、米国のほかチリからも増えてきている。ピューレなどが含まれる調製いちごは、中国、米国、フランスなどから輸入されている。

いちごの輸入量の推移



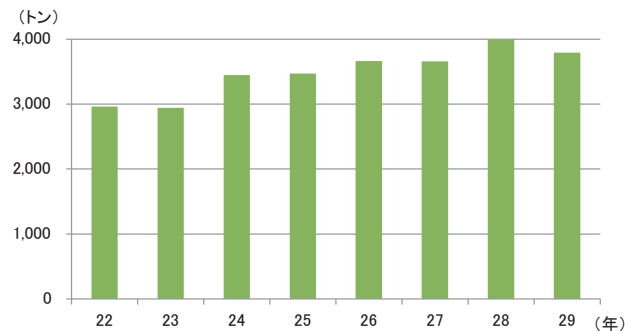
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」(原資料：財務省「貿易統計」)

冷凍いちごの輸入量の推移



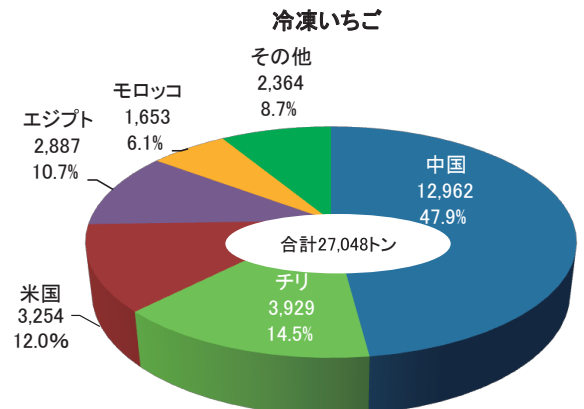
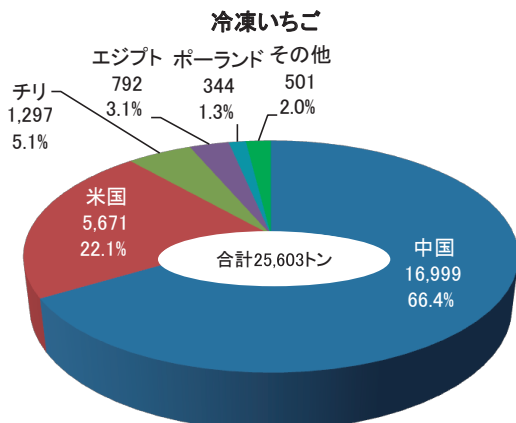
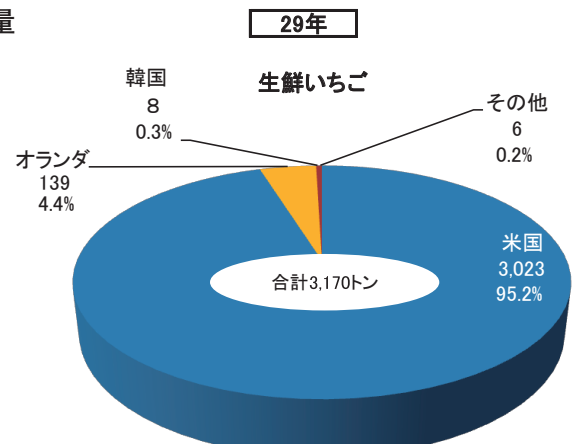
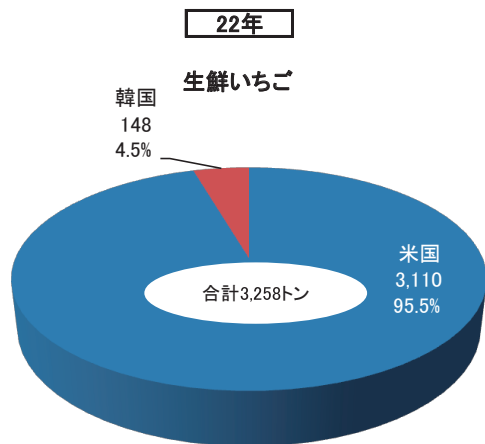
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」(原資料：財務省「貿易統計」)

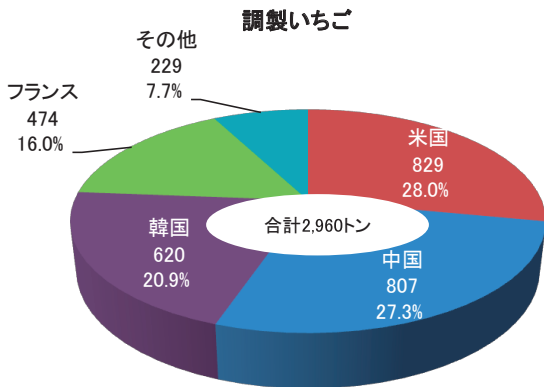
調製いちごの輸入量の推移



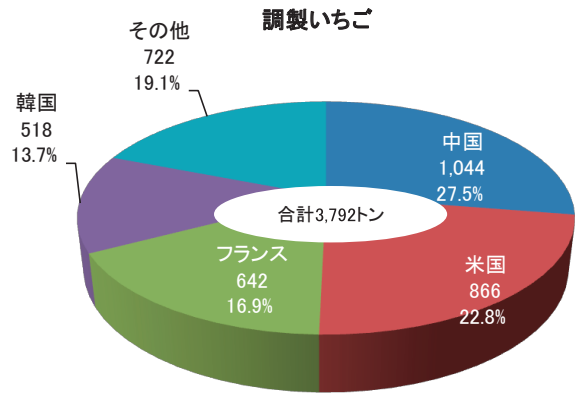
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」(原資料：財務省「貿易統計」)

国別輸入量





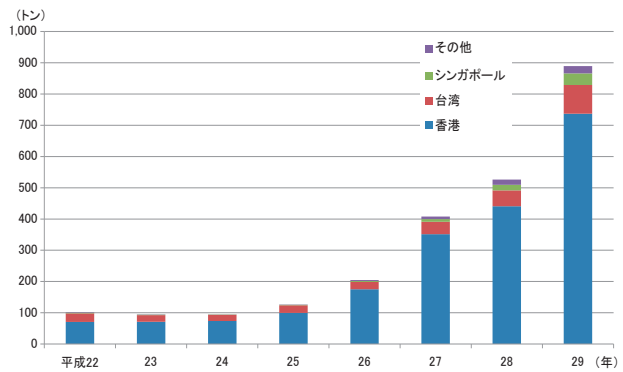
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）



輸出量の動向

いちごの輸出実績を見ると、平成22年から24年まではほぼ横ばいとなっているが、25年から徐々に増え始め、29年には対前年比1.7倍まで増加した。関税がないうえに、日本の港で植物検疫を受けずに輸出できることから香港向けが太宗を占めるが、台湾、シンガポールへの輸出量も伸びている。海外では、日本産いちごの食味の良さに対する認知度が高まっており、今後は富裕層に加えて中間層もターゲットにした価格帯も伸びていくものと期待されている。

輸出量の推移（生鮮いちご）

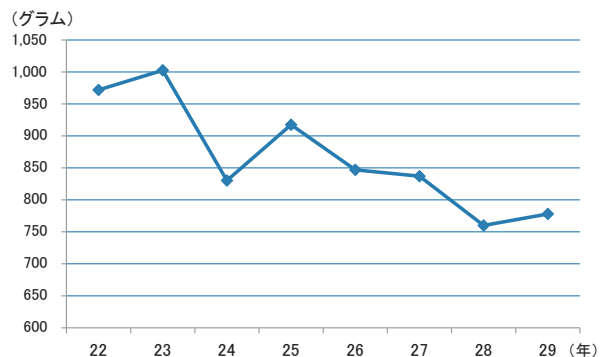


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

いちごの消費動向

いちごの1人当たり年間購入数量は減少傾向にあり、平成29年には778グラムとなった。これは、標準的ないちごパックで約3個分である。いちごは、1960年代までは春から初夏が旬であったが、品種改良やハウス栽培も普及し、クリスマス需要に合わせた冬場の出荷も増えてきている。老若男女に人気があるいちごは、野菜、果実の中でもビタミンCが豊富で、5～6粒で1日に必要な50ミリグラムを摂取できるという魅力もある。ビタミンCは抗酸化作用があることから動脈硬化や脳卒中を予防したり、風邪の予防も期待できる。冷凍で保存もできるので、ジャムやジュースの材料としてストックしておくのもお勧めである。切らずにそのまま食べられるので、気軽に食卓に乗せたい。

1人当たり年間購入量の推移



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：総務省「家計調査年報」）